

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※¹ ミュンスター市は、中世以来の細い石畳の道が、道路の多くを占める。1980年代のシヨ^① トウに、あまりの渋滞に耐えかねて、町の中心部にクルマで乗り入れることを禁止した、これが自転車政策のスタートだった。乗り入れ可能なクルマはわずかに乗り合いバスだけ。荷物運びのトラックは朝夕、あわせて一時間に制限した。また自転車での移動を奨励した。自転車は道路に占める面積という意味で、クルマの半分どころか、およそ7分の1以下にすぎないという理由からだ。

もちろん反対論はたくさんあったが、市は押し切った。ミュンスター市が学術都市であり、政策の本質を理解できる割合が高い、つまり市民意識が高いという^{※2} ファクターも幸運に作用したのだと思う。

話はまず渋滞の緩和である。だからして、当初の市の政策は「自転車を使おう」でなく「クルマを使わないようにしよう」というところにあったそうだ。

「クルマの代わり」は別段、公共交通のバスでも徒歩でも何でもよかった。だが、市民が選んだのは自転車だった。ドア・トゥ・ドアで便利。自転車という選択肢はまず利便性で浮上した。⁽¹⁾ ここは重要な点なので憶えておいていただきたい。市民は自転車を強制されたのではなく、さまざまな「クルマ以外の選択肢」の中から、自ら自転車を選んだのだ。

ところが、いったんそうしてみたところ、渋滞が減るだけでなく、それ以外の意外な結果が表れてきた。

最初に市民が気づいたのは、クルマで移動するよりも都市内移動に要する時間が、はるかに短くなったことだ。もちろん、都市中央部からクルマが一掃されることによって、渋滞がなくなったことも大きい。市民は等しく自転車のスピードを実感するようになった。

自転車は思いの外、速い。結果、ここに住む市民は、⁽²⁾ クルマに乗らないことによって、ビジネス効率が上がるという意外な経験をするようになる。

つづいて、市民が驚いたのが交通事故の犠牲者が激減したことだ。当たり前のことだが、交通事故というものにはクルマが関わらないことには、人が死ぬ、というシリアスな結果を生みにくい。自転車と歩行者との事故、または自転車同士の事故、で人が死ぬことは、まったくないとは言わないが、よくよくのことがあつてのことだ。クルマが関わらない限り、交通事故で人が死ぬケースは^② カクダンに少ない。おおよそ桁が三つ違う。

三つ目に人々が気づいてきたのは、自転車で乗ることによって、市民が健康になったことだ。この町の医療費の激減がそれに大いに物語ったという。

そして¹ に環境がやってくる。街の空気がキレイになった。これは誰もが認めるところで、大気の汚染にクルマの排気ガスがこれほどものを言っていたのかと、市民の誰もが気づきだした。

これには² も大きいものを言った。80年代末期の酸性雨問題（これはドイツにおいて特に激しかった）、90年代以降の地球温暖化問題。この大きなエコの流れは、自転車の背中を直接的に押した。渋滞緩和のためには始まったミュンスターの自転車政策は、ここにきて、初めて^③ 環境問題に形を変えたのだ。そして欧州各国がその後についてくることになる。

オランダも早くから自転車政策を始めていた（ミュンスターは当初、アムステルダム市を自転車化のモデル都市としていた）。

アムステルダムでは町中を縦横無尽に走るトラム（路面電車）と自転車とが交通の主役だった。自転車は必ずこうした代替公共交通機関とともに都市に組み込むべし、というのが、アムステルダムの気づいた^{※3} テーゼだ。なぜなら自転車に乗れない人、障害者、乳児、その他の人は必ずいるわけだし、雨の日の対策という意味でもトラムは有効だからだ。

自転車に乗ることは、決して強いられるべきことじゃない。こうしたホ^③カン交通機関を用意することで、自転車政策はうまくいく。

ミュンスター駅前には巨大な「サイクルステーション」がある。これは3500台近い収容能力を誇る駐輪場

と自転車修理工場、部品ショップ、洗浄機械、レンタル自転車（有料）などがセットになった一大自転車施設で、ひっきりなしに市民が自転車をに入れては出していく。見た目には巨大なガラスのピラミッドといった風情で、なんだか現代芸術の趣すらある。ガード下などに薄暗く、ビンボー臭く造る日本とはまさしく雲泥の差で、これにまさに (4) 日欧の自転車へのイメージの差なのである。

私と会ったドイツ人はこう言ったものだ。

「世界有数の自動車の輸出大国であるドイツは、その責任として、個人個人が、自分だけでも温暖化ガスの排出量を少なくしようという思いがどこかにある。日本人も同じようなことを考えているだろうか？」

(5) 私は答えることができなかった。

こういつた国々での風景を見ていて気づくのは、自転車に乗っている市民の中に老人の姿が目立つことだ。結構なお年を召されたお爺さんやお婆さんが、颯爽とハイスピードで自転車を漕いでいく。彼らはその長い人生の中で、たぶん（日本人よりも）自転車に慣れ親しんできた。だからこうも自転車を速く漕ぐことができるのだ。また一方「自転車専用信号」「自転車専用レーン」などの (6) インフラがそれを可能にしている。

ドイツ、中でもノルトライン・ヴェストファーレン州は、州全体が次第にミュンスター化し始めた。この中には旧西ドイツの首都、ボンも含まれている。デンマークも、フィンランドも、次々と自転車専用道の建設に着手している。

ここまででどうにお気づきのことだと思うが「自転車のメリット」とは「過度なクルマ社会の弊害」の裏返しだ。(6) この二つはコインの裏表なのである。

自転車のメリットと自動車のデメリットが一緒であること。欧州各国が取り組み始めた自転車政策は、この部分の理解が日本と違う。自転車はクルマの代わりとなり得て初めて、大いなるメリットを発揮するのである。

(7) そこを思い切らないと本当の意味での自転車の意味は見えてこない。

ミュンスターの都市計画課長はこうも言った。

「自転車の走りやすい街とはどんな街だか分かりますか？ 自転車が走りやすい、とは、とりもなおさず、クルマが走りにくい街、ということなのです」

前提はここだ。自転車を増やすことや自転車の活用自体は、別に目的でもなんでもない。クルマをできるかぎり減らすことこそが眼目であり、これこそが、真の地球環境対策なのである。そして、それは急を要している。

(正田智『だって、自転車しかないじゃない』より。)

(注) ※1 ミュンスター市……ドイツ北西部の都市。

※2 ファクター……要素。

※3 テーゼ……基本方針。

※4 インフラ……社会生活の基盤となる施設。

問1 線①②③と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ショトウ

ア 新会員のトウロクをする。 イ 試験のトウジツに熱を出す。
ウ 初対面で意気トウゴウする。 エ 野球選手としてトウカクを現す。

② カクダン

ア 調理師のシカクを取る。 イ 当選がカクジツとなる。
ウ 組織のカイカクを進める。 エ 新たな事実がハツカクする。

③ ホカン

ア 健康カンリに留意する。 イ 連続ドラマがカンケツする。
ウ ナンカンの司法試験にいどむ。 エ 経済のコンカンをゆるがす問題。

問2

1

にあてはまるもつとも適切な漢字二字の言葉を答えなさい。

問3

線(1)「ここは重要な点なので憶えておいていただきたい」とありますが、「重要な点」とはどの

ようなことですか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア クルマの利用を規制することが市民に自転車利用をうながす結果になったこと。
- イ クルマより利便性ではるかに優れているからこそ市民が自転車を選択したこと。
- ウ 市民が自ら自転車を選択できる形にすることで自転車政策がうまくいったこと。
- エ 学術都市であったために自転車政策の本質をよく理解する市民が多かったこと。

問4

線(2)「クルマに乗らないことによって、ビジネス効率上がる」とありますが、それはなぜですか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 渋滞の解消と自転車のスピード感によって、イライラすることなく気持ちよく仕事ができるから。
- イ 自転車は意外に速く走れるため移動のための時間が短縮され、その分仕事の処理量が増えるから。
- ウ クルマより自転車を使ったほうが速く走ることができるため、人々もてきぱきと働くようになるから。
- エ 自転車は小回りがきくのでクルマを使うよりも移動時間のロスが少なく、時間通りに仕事ができるから。

問5

2

にあてはまる言葉としてもつとも適切なものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大衆の眼め
- イ 科学の発達
- ウ 情報化社会
- エ 時代の風
- オ 気候の変動
- カ 社会的異変

問6

線(3)「環境問題に形を変えた」の説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 道路の深刻な渋滞問題が解消したために、渋滞緩和のために始められた自転車奨励策は環境保護を目的とする政策に改められた。
- イ 自転車が大気汚染の緩和にも有効であったために、道路の渋滞緩和を目的とした自転車奨励策が環境保護を目的とする政策に移行した。
- ウ 道路の渋滞問題よりも環境問題が優先されるようになったために、渋滞緩和のための自転車奨励策も環境保護を目的とする政策にすりかわった。
- エ 市民の関心がさまざまに変化したために、道路の渋滞緩和を目ざした自転車奨励策もさまざまな曲折を経てようやく環境保護を目的とする政策に落ち着いた。

問7 ——線(4)「日欧の自転車へのイメージの差」の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本では一般的に自転車は補助的な乗り物としか考えられていないが、ヨーロッパでは移動のための優れた乗り物の一つとして考えられている。
- イ 日本では一般的に自転車は時代おくれの乗り物としか考えられていないが、ヨーロッパではこれからの時代に最も合った乗り物として考えられている。
- ウ 日本では一般的に自転車は体力のある人だけの乗り物だと考えられているが、ヨーロッパでは子供から老人まで気軽に乗れる便利な乗り物だと考えられている。
- エ 日本では一般的に自転車は貧しい人々が利用する乗り物だと考えられているが、ヨーロッパでは貧富の差ひんぶに関係なくだれもが利用する乗り物だと考えられている。

問8 ——線(5)「私は答えることができなかった」とありますが、それはなぜですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本は確かに自動車の輸出大国ではあるが、土地がせまく人口の多い国なので、ドイツのようなぜいたくな施設の建設は無理だと感じたから。
- イ 日本も世界有数の自動車の輸出大国でありながら、環境保護を推進するために必要な自転車の施設は貧弱なものしかなくはずかしくなったから。
- ウ 日本はドイツと同様に自動車の輸出大国であるにもかかわらず、日本人もドイツ人のように環境問題に関心を持っていると自信を持って言えなかったから。

エ 日本も世界有数の自動車の輸出大国ではあるが、個人が温暖化ガスの排出量を増加させているわけではないので、一個人が責任を感じて何かをする必要はないと思ったから。

問9 ——線(6)「この二つはコインの裏表なのである」とありますが、「コインの裏表」の説明として適切でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自動車は占める面積が大きいので渋滞を引き起こし、また広い駐車場も必要であるが、自転車は渋滞を引き起こすことは少なく、駐輪のスペースもせまくて済む。
- イ 自動車は交通事故を起こした場合の犠牲が大きく、場合によっては死者を出すこともあるが、自転車は交通事故を起こしても相手に大きな損害をあたえない。
- ウ 自動車に乗ってばかりいると運動量が減り健康を害することになりがちだが、自転車は乗ることで自然に運動することになるので健康的なからだになれる。
- エ 自動車の排気ガスは大気汚染や地球温暖化を引き起こす一因であるが、自転車は有毒な排気ガスをいっさい出さないので地球環境を害する可能性が低い。

問10 線(7)「そこを思い切らないと本当の意味での自転車の意味は見えてこない」とありますが、具体的にどうすることが必要だと筆者は考えていますか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 天候に関係なく障害者でも乗れるような、クルマの代わりとなり得る自転車の開発に力を注ぐこと。
- イ 反対意見を押し切ってもクルマの利用を法で規制し、市街地では自転車の利用を義務づけること。
- ウ 専用道路や大駐輪場の建設など、費用がかかっても自転車を利用する人のための施設を整備すること。
- エ 自転車のメリットをくり返し説明して、自転車がいかに利便性の高い乗り物であるかを周知させること。

問11 次の文は本文における筆者の主張をまとめたものです。□にあてはまる言葉を本文中から十字でぬき出して答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

真の地球環境対策として、
□
づくりを急ぐべきだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

本文にいたるまでのこと 僕(リツ君)は、桜川町でサンドイッチ店を営む父と二人で暮らしており、父の店を手伝っている「オーリース」や、アパートの大家さんである「マダム」と時折夕食を共にしている。また、父・オーリースさん・マダムからお金を出し合ってもらい、隣町・月舟町の食堂に行っているいろいろな大人達の話聞かせてもらいながら夕食をとることもある。

僕の住んでいる町は桜川という。路面電車の桜川駅をおりたところから商店街がつづいている。月舟町よりずっと短いけれど、肉屋、魚屋、八百屋、果物屋、和菓子屋、文房具屋が並び、写真館があり、整体院があり、コンビニもあり、そして、いちばん最後に、うちのサンドイッチ屋がある。父のつくるサンドイッチは人気がある。

「何もかも手づくりっていうのがいいね」「たまごサンドとかハムサンドとか、どれもごく普通のサンドイッチなんだけど」「安心する味だな」「変な味がしないし」「ここが、いちばんおいしいね」

ととっても、それはあくまで町の中の「いちばん」ではない。雑誌やテレビの取材があつて、日本中に紹介されたときもあつたけれど、まさか、遠いところからわざわざサンドイッチを買いに来るひとはいない。たとえば、一時的にお客さんが増えても、時間が経つと、やっぱり記憶から消えてしまうみたいだ。

そもそも父は「この町のひとたちのためにつくる」と自分で決めている。

僕はその考え方が狭いような気がして、(1)賛成できなかつた。父はほかのことになると「もつと広い視野を持たなきゃ」と言うのに、お店の話になると、「うちはこれでいいんだ」と視野を広げようとしていない。

(2)「いいんじゃないの」とマダムが言った。

「僕もそう思うな」とオーリイさんも父の考えに従っている。

食堂へ行かない日の夕ごはんは、父とふたりで食べるときもあるけれど、マダムのアパートの台所でオーリイさんと三人で食べることが多い。僕たち三人は親子でも兄弟でもないのだけれど。

ときどき、おかしな気持ちになる。「おかしな」という言葉は「不思議な思い」と「楽しい思い」のどちらにも使い、そのふたつが混ざり合ったときにも使う。三人で食事をしていると、ちょうどそんな感じで、僕はそんなおかしな感じが、いちばん気持ちが落ち着く。

「あの子、リツ君」

とマダムが食事のあとでお茶を飲んでいるときに言った。

「桜川のひとたちに、おいしいって言ってもらうのと、世界中のひとにいいって言ってもらうのは、どっちも同じじゃない？」

「そうかな」と僕は首をひねった。「なるべく、たくさんの人に、おいしいって言ってもらった方がいいと思うんだけど」

「定点観測と一緒だよ」とオーリイさんが言った。「こないだ、学校で教わったって言ってたよね？ 定点観測の結果から全体の傾向を推し量るってことはあるんじゃないかな。世界は点の集合体なんだから」

なんだか難しい。

「つまり、世界は小さな町が集まって出来てるんだよ」

「そんな、大げさな話じゃなくてね」とマダムが言った。「まずは、自分の隣にいるひとに、おいしいって言わせなきゃ。お父さんはそういう考えなのよ」

僕は少しずつ理解していた。

「むかし」にも「僕のむかし」と「世界のむかし」があるように、自分が生きてゆくところも、「小さな世界」と「大きな世界」がある。そして、父は「小さな世界」を選んだ。⁽³⁾「そういうことだろうか。」

「そういえば、月舟町の食堂はどうなの？」

マダムが僕の湯呑みにお茶をつぎ足しながら訊いた。

「食堂のひとたちと仲良くなった？」

「ええと——」と僕はその質問にどう答えていいかわからない。

「どんなひとが来てるの？」

「みんな、大人のひとたちです」

「何か話とかした？」

「ええと——仕事のこととか」

「仕事って？」

「それはいろいろです。というかです。ね、僕が皆さんに訊いてるんです。あなたはどんな仕事をしてますかって。そしたら、皆さん、自分の仕事について説明してくれて、僕にちょうどいい仕事は何なのか、一緒に考えてくれるんです」

「ふうん」とマダムはそう言って、それから、

「お父さんにも訊いてみた？」

と、⁽⁴⁾変なことを言った。

「父にですか？ 父に何を訊くんですか？」

「仕事のこと」

「だって、訊いたってしょうがないじゃないですか。よく知ってるし」

「本当に？」とオーリイさんが少し意地悪そうに言った。「⁽⁵⁾本当にリツ君はお父さんの仕事を知ってるのかな？」

「知ってますよ」と僕ははっきり答えた。

「ふうん」

とマダムがまたそう言って、いつものように甘い香りのするタバコに火をつけた。一瞬だけ恐い顔をしてタバコを吸い、それから横を向いて、ゆっくり煙を吐き出した。

「何だつて？」

と父はまずそう言った。そう言うと思っていた。父の口ぐせだ。耳がよく聞こえないのかな、と最初は思った。でも、本当はよく聞こえている。聞こえているのに、「何だつて？」と訊き返す。

「だから——」

と、こういうとき僕は少しじれったくなる。

「仕事のことです。お父さんは自分の仕事について、どう考えているのかなあと思って」

「どう考えてる？　つて言われてもなあ」

これも予想していた答えだった。必ず「そんなこと言われてもなあ」と言つて、僕が訊いたことに答えない。ところが、

「おれは、町のひとに食べてもらいたくてつくってるんだよ」

と父は答えた。でも、これは前に聞いたことがある。

「それも、毎日食べてもらいたいんだよ。実際、毎日食べてくれるひとがたくさんいるし、こつちもそのつもりでつくってる。だからこそ、⁽⁶⁾ 本当においしいものをつくらない」と

(え?)と心の中の小さな僕が驚いた。父も町のひとたちが毎日食べているものをつくっていたのか——。

「サンドイッチはバランスなんだよ。お前にはまだわからないだろうけど。静と動というか、静かなものにぎやかなものがひとつになつてる。それがサンドイッチなんだな」

(え?)と僕はさらに驚いた。

「パンは白いだろう？　これがつまり静だよ。そして、中に挟む具は色とりどりでにぎやかだろう？　これが動

だね。このふたつのバランス、ちょうどいい感じの調和がサンドイッチのおいしさなんだ」

そんな話、これまで聞いたことがなかった。

「これ、昨日、思いついたんだよ。あたらしいサンドイッチをつくりながら」

そう言つて父は、「ちよつとリツも試食してみないか」と、明日から店に出す予定の「目玉焼きのサンドイッチ」をつくり始めた。

「まず、厚切りのパンをまな板の上のせてバターを薄く塗り、そこへレタスを一枚敷いて、塩とこしょうでこんがり焼いた目玉焼きをのせる」

父はつくりながら、手順をひとつひとつ説明してくれた。

「目玉焼きの表面にトマト・ケチャップを少しだけ塗ると、ほら、レタスの緑と卵の黄色とケチャップの赤が鮮やかだろう？　そして、これを隠すように厚切りの白いパンを最後にのせる。仕上げに、音もたてずに三角にさつと切る」

出来上がった。

「さあ、召し上がれ」

本当を言うと、マダムのところでいつもより多めにごはんを食べてきたから、お腹はすいていなかった。でも、ひと口食べたら、口の中ですべての味がひとつになつて、思わず「おいしい」と声が出してしまった。

「だろう？」と父が得意そうに言った。

(吉田篤弘『つむじ風食堂と僕』より。出題にあたり、原文の表記を一部改めました。)

問1 〰〰〰線a「首をひねった」、b「じれったくなる」の本文中での意味としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 首をひねった

ア 違うと思ひ反発した
イ 予想外のこと驚いた
ウ 納得ができなかった
エ 信じられずに警戒した

b じれったくなる

ア はぐらかされたようでいらだたしい気持ちになる
イ ばかにされている気がしてくやしい気持ちになる
ウ まともに相手にされなくてさみしい気持ちになる
エ 自分の願いが聞きいれられず悲しい気持ちになる

問2 ***印以降の本文を二つの部分に分けた場合の、後半部分の最初の三字を答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

問3 〰線(1)「賛成できなかった」とありますが、僕が賛成できなかった理由を述べた次の文の

〰〰〰にあてはまる言葉を本文中から三十五字以内でぬき出し、最初と最後の三字ずつを答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

僕は 〰〰〰 から。

問4 〰線(2)「いいんじゃないの」とありますが、このようにマダムが言った理由としてもっとも適切な

なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「父」は普通のを長い間作り続けることで成功してきたのだから、視野がせまくても構わないのではないかと考えたから。

イ 身近なひとであれ世界中のひとであれ「父」の作ったものが喜ばれるなら、その価値は変わらないのではないかと考えたから。

ウ 世界は小さな町が集まってできているのだから、小さな町でも定点観測を続けることに意味があるのではないかと考えたから。

エ 世界中のひとを相手にすることなどできないので、身近なひとにさえ喜んでもらえば十分な成果なのではないかと考えたから。

問5 〰線(3)「そういうことだろうか」とありますが、このときの「僕」についての説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父の考えを自分なりに受け止めようとしたが理解できずにとまどっている。

イ 大人たちが自分を適当に丸めこもうとしているのではないかと疑っている。

ウ 自分の考え方に確証を持っていないながらも自分なりに理解しようとしている。

エ 大人の言葉は難しくわがわがわからないので考えることを打ち切っている。

問6 ——線(4)「変なことを言った」とありますが、「僕」はこのときなぜ「変なこと」だと思ったのですか。

その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が父に仕事の話を読いたところで相手にしてくれないことはわかりきっているのに、マダムは自分に質問させようとするから。

イ 月舟町の食堂で見知らぬひとを相手にしてはじめて訊ける質問を、毎日顔を合わす父に尋ねることなどはずかしくてできないから。

ウ 将来自分がどのような道を選んでいくのがいいかということ、今から親にあらたまつて尋ねることなどは思っていないから。

エ 自分の父親の仕事なんて知っていて当たり前なので、一緒に暮らしている父にいまさら訊くような質問ではないと思っているから。

問7 ——線(5)「本当にリツ君はお父さんの仕事を知ってるのかな？」とありますが、ここでのオーリイさんの気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「お父さんの仕事」のことを実際のところ何もわかっていない「僕」に対して、大人の世界のきびしさを教えたいという気持ち。

イ 「お父さんの仕事」のことをわかったような気になっている「僕」に対して、軽くからかいながら考え直させたいという気持ち。

ウ 「お父さん」に対して疑問を抱く「僕」にマダムが腹を立てていることを察し、間に入りふんいきをやわらげたいという気持ち。

エ 「お父さん」のことをずっと支えているマダムや自分の思いを、すなおになれない「僕」になんとかかわかってもらいたいという気持ち。

問8 ——線(6)「本当においしいものをつくらないと」とありますが、ここでの「父」の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身近なひとに毎日食べたいと思われようなものを作る努力を続けなければならないという気持ち。

イ 毎日買いに来るひとに驚きを与えるようなめずらしいものを作り続けなければならないという気持ち。

ウ たくさんのひとの期待に応える新しいものを常に作り出せるようにならなければいけないという気持ち。

エ 身近なひとの意見を聞いて世界に認められるようなものを常に作り続けなければならないという気持ち。

問9 ——線(7)「得意そうに」とありますが、このときの父の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しいサンドイッチを「僕」に「おいしい」と言わせたことで、自分が新しいものを生み出せる視野の広い人間なのだと言明できて満足している。

イ 自分の仕事を心のどこかで認めていなかった「僕」が「おいしい」と言ってくれたことで、「僕」から尊敬されていることを感じうれしく思っている。

ウ 自分にとって一番身近な人物である「僕」から、新しく考え出したサンドイッチを「おいしい」と言ってもらえたことで、ほこらしさを感じている。

エ お腹がそれほどすいていなかった「僕」が新しいサンドイッチのおいしさを認めてくれたので、料理人としての自信を取りもどし達成感を味わっている。

問10 本文の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「父」と二人でくらししている「僕」が、個性豊かな大人たちに見守られながら「父」の仕事について理解を深めていくようすが、対話を中心に生き生きとえがき出されている。

イ まだおさない「僕」が心あたたかな大人たちに支えられ少しずつ成長していくようすが、「僕」とその中にいるもう一人の「小さな僕」とを対比させる形でえがき出されている。

ウ 他の人に対して心を閉ざしがちであった「僕」が、ものづくりに生きる「父」のひたむきな生き方を知り心を開いていくようすが、短い文の積み重ねを用いて菌切れよくえがき出されている。

エ 桜川町に物足りなさを感じていた「僕」が、「父」の仕事を理解することで町のよさに気づき、自分が住む町に愛着を抱いていくようすが、「僕」と「父」両方の視点からえがき出されている。

一

問 1

①

②

③

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

問 11

二

問 1

a

b

問 2

問 3

}

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

二の得点

二の得点

一の得点

一の得点

総得点

受験番号
氏名